

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (19)

コンテンツを通じて見る 「母」の〈名〉とメッセージ

秋山麻実



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション（略称 TeaPot）」にてバックナン
バーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼コンテンツ化される情報

デジタル化により、情報の質は変わる。複製版『幼児の教育』では、物理的な厚さ、重さを感じ、幾つもの興味深い記事に目をとられながら読んでいたものが、クリックを重ねて目指す記事を引き出せるようになると、何が変わるのか。

まずは、極めて便利になる。通信環境以外の物理的な条件から、私たちは解放され、時と場所を選ばずに本誌を読むことができる。

その一方で、物理的な質感が捨象される。私たちは厚さ、重さ、大きさがあったことそのものを忘れる。かつて雑誌を読者が手にし、表紙を眺め、端から、あるいは関心のある箇所から読み、広告を見た、その感覚がなくなる。目次は記事の重要性と順番を示す情報ではなく、「コンテンツ」(中身・内容)情報に過ぎなくなるし、雑誌の内容と編集がもつ、価値

そのものを読者の中に育てる機能を、私たちがなぞることは困難になる。

もちろん、一号ずつ読むこともできるし、雑誌の
もつ啓蒙的メッセージは消失しない。しかし、データベースの最大の利点は検索である。データベースは、収録されたコンテンツを均質化する(たとえば、等間隔に並んだ表題)。検索とは、その中からキーワードを含むものを取り出すことであり、つまりそれは、均質な情報群を、内容によってではなく記号によって、二分することである。

データベース上ではこの分割により、特定のコンテンツを入手することは容易になるが、雑誌編集自体がもつメッセージを受け取る機会は減る。意図しない情報との出会いの契機は、雑誌のページをめくる中というよりは、検索ワードを共有する中にあることになる(たとえばレコードやCDからコンテンツのダウンロードへ、という音源入手方法の変化の

中では、これはすでに起こっている)。

▼「教育」保育「子育て」の地平と女性の「名」

ところで、現代における情報のデジタル化と同様、雑誌は、明治維新を迎えた日本において、新聞等と共に新しいメディアであった。女性雑誌は一九二〇年前後に創刊ラッシュを迎え、女性の教養や道徳への政治的・教育的配慮と娯楽を継続的に提供する媒体として定着していったが、その中において、明治三十四年に創刊された「婦人^注と子ども」は、女性雑誌として見れば後発ながら、保育専門誌という立場から「女性」を名付け直すものだった。「婦人教育の普及」の重要性を指摘した「発刊の辞」からも明らかのように、読者ターゲットは女性である。しかしそれは漠然とした「女性」ではなく、「婦人と子ども」の広告(『女学世界』創刊号、明治三十四年)を見ると、読者は「少女」「母」「女子」「生徒」「教員」という

ふうにな付けられている。そしてこれは、『婦人と子ども』のねらいとする機能と関連付けられている。

大に興味を感じしむると共に大に智能を開き性情を養ひ且つ日常家庭の生活を益せしめんことを期し、文章は特に平易に認めて假名さへ附したれば家庭必須の讀本たるは言ふに及ばず、小學校、高等女學校、女子師範學校等の生徒には科外唯一の必讀書たるべく、幼稚園、小學校、高等女學校、師範學校等の教員には子女教育上の良參考書たるべし。

本誌は創刊から第七卷第三号まで、各記事について(子ども)(家庭)(學術)(文苑)(説林)等といった分類を施していた。途中、分類の変更はあったが、ともあれそれらは一見、他の女性雑誌が扱う修養、教養、文学、社会、家事、保育といった内容

と重なっているように見える。しかしこの分類を、「少女」や「母」を対象に家事や子育てについて発信し、「教師」のために保育や教育について(説林)で扱い、読者全体に対して、子ども向けの読み物や遊戯、読者自身の趣味や教養のための文学や情報を提供すると考えれば、本誌は「女性」を分節化し、名付け、それに対して機能的に編集された雑誌であったといえる。またその(名)は緩やかに結び付き、(教育||保育||子育て)と連なる地平を担うものだった。

こうした地平を切り拓くために本誌は、「平易に」「假名」をふる形式で、かつ専門的に、子どもの育ちについて語るといふ文法を必要としていた。また専門的あるいは規範的知識の伝達だけでなく、読者への呼びかけや、保育や子どもに関する実践家の目を通した記述や、実践的な保育教材や遊戯の素材・歌などが盛り込まれていた。つまり雑誌が読者を、啓蒙だけでなく声の多層性によって、生み出してい

たのである。

▼「コンテンツからみる」戦時「母」

本稿執筆時点では、二〇〇七年十二月までの記事がインターネット公開されているが、その中で、こうした〈名〉は、どれだけの表題に含まれているのか。検索すると、「母」が379、「教師」83、「保母」115、「保育者」232、「娘」15、「少女」11、「生徒」15という結果が出た。

明治期に「保育」という新しい概念とその方法・内容が発展していく際に、従来の子育てを参照点しつつも、新しい「家庭教育」のあり方を提唱するという、いわば合わせ鏡のような言説が構築される。私はその様相を、本誌を手掛かりにして描き出そうと試みたことがあるのだが、今回データベース検索とすると、数の上では、「母」についての記事が特に多いことがわかった。その多くは、「母」に向かっ

て発信されたメッセージである。「母」による手記はしばしば見られるし、初期には連載もある。また母の会等についての記述もある。

しかし、その半数以上を占めるのは、「幼児の母」という連載コーナーであり、第四十巻第一号から第四十三巻第十号まで、その数225にのぼる。これは、抜き刷り四ページを、園を通じて母親たちに頒布するものであった。幼稚園教育を通じた「家庭教育」の―家庭における教育、と同時に家庭のあり方を教育する―メッセージだったと考えられる。

こうした「家庭教育」メッセージが、戦時の国家体制と連動する時期に発信されていたことは、興味深い。第四十二巻第一号からは、記事の上に「大東亞戦争必勝完遂」と書かれている。一見して戦時意識を喚起する表題は、以下のとおりである。

「時局下の母」

(第四十巻第五号)

「母の時局認識」

(第四十卷第七号)

「戦時下の母の三大任務」

(第四十三卷第十号)

「新體制」

(第四十卷第十号)

「母の講座 戦時家庭教育心得」

「新體制の母」

(第四十一卷第二号)

文部省指示要項解説」(第四十二卷第十、十二号)

「戦時家庭」

(第四十二卷第一号)

「教育講話 我子に國民感情の涵養」

(第四十二卷第一号)

そのほか料理コーナー、「幼稚園から」コーナー、

日本國民たることの喜び」

(第四十二卷第一号)

倉橋による「教育講話」「母の講座」「幼稚園でして

「母の大東亞知識」

(第四十二卷第五号)

いること」「わが子を良い子に」シリーズなどがある。

「となり組」

(第四十二卷第十一号)

この連載では、「母」は発言主体というより、もつ

「我が子、國の子 國の子、我が子」

(第四十三卷第一号)

ばら読み手である。そして総力戦体制が、啓蒙的な、

「戦時家庭の教育力」

(第四十三卷第二号)

あるべき「母」の言説を取り込んでいく。たとえば

「大東亞戦下の入園」

(第四十三卷第四号)

倉橋の「教育問答 幼児の時局認識」では、

「戦下の夏の子」

(第四十三卷第七号)

「今、既に、國が戦をしてゐるのです。それを、子どもにしっかりと知らせることが、いゝも悪いもある

「教育問答 幼児の時局認識」

(第四十三卷第七号)

ものですか」

この夏の家庭の心得の第一」(第四十三卷第七号)

(第四十三卷第七号)

「おとなのわれわれに分かるやうには分らないで

「この大きな時代の日本の母」

(第四十三卷第八・九号)

せう」

(第四十三卷第八・九号)

(第四十三卷第八・九号)

とし、戦争について家庭で子どもに伝えるべきであ

るとする。またその際、子どもの「分かる」は、大人との比較の内に位置付けられてしまうのである。

しかし一方で、子どもの育ちについての専門誌である以上、子どもの目線に立つ保育や子育ての重要性もまた、継続して発信されざるを得ない。たとえば前出の倉橋と同じページに、留岡よし子が、咳で胸が痛んだ子どもの

「僕の大和魂がこわれたんぢやないでせうか」という言葉を取り上げ、子どもの「分かる」ように話さなかったことを反省している。

また、時には、平時と同様に子どもが育てられることの大切さが訴えられる。第四十二巻第一号「幼稚園から」欄では、

「幼稚園では、お子さん方と、平和の時と同じやうな、なごやかさで遊び、唱ひ、踊つてゐます」

「私達は、お子さんを守つてゐます。お子さんの心を守つてゐます」

とある。

このように戦時下、「母」へのメッセージには、子どもの育ちを共有する言葉と、啓蒙的な言葉、子どもと大人の目線、平和と戦争との混在が見られた。おびただしい数の啓蒙的メッセージは、時局に合った「母」教育を担った。子どもを出発点とすることは、平和を暗示する契機でもあったが、しかしそうした言説は、子どもに軍国主義を教えることと並列であることを強いられた。コンテンツが示す整然とした「数」は、そうした言説に、読者がいかにさらされていたかを、数秒で見せてくれる。

(山梨大学准教授)

注(参考文献)

1 小山静子『貴女の友(復刻版) 解説』柏書房

二〇〇七年

2 拙稿「明治後期の「母」と保母―「婦人と子ども」誌

をてがかりに」『東京大学教育学研究科教育学研究

室紀要』第二十三号 一九九七年六月